スライド7：問題例1

発表・再生のテスト

日本語を見て、英語を書かせる問題である。解答をなるべく統一させるため、または教師が引き出したい解答を産出させるため、スペルの最初の文字だけを提示しておくこともできる。

定期テストでも使用できるし、JACET8000のような頻度表からランダムに抜き出して使用すれば、発表語彙サイズのテストとしても用いることができる。

例：1. 勝利 (v )

2. 勇敢な　　(b )

3. 騒音　　　(n )

スライド8：問題例2

受容・再生のテスト

英語を見て、日本語訳を書かせる問題である。

定期テストでも使用できるし、JACET8000のような頻度表からランダムに抜き出して使用すれば、受容語彙サイズのテストとしても用いることができる。

スライド9：問題例3

発表・認識のテスト

日本語を見て英語を選ばせる問題である。4択式ではなく3択式でもよい。選択肢の品詞はなるべく同じものに揃え、また頻度やスペルの長さもなるべく似たような英単語にするとよい。

定期テストでも使用できるし、JACET8000のような頻度表からランダムに抜き出して使用すれば、発表語彙サイズのテストとしても用いることができる。

スライド10：問題例4

受容・認識のテスト

英語を見て日本語を選ばせる問題である。4択式ではなく3択式でもよい。選択肢の品詞はなるべく同じものに揃え、また日本語訳の長さもなるべく似たようなものにするとよい。

定期テストでも使用できるし、JACET8000のような頻度表からランダムに抜き出して使用すれば、受容語彙サイズのテストとしても用いることができる。

スライド11：問題例5

文脈内でのテスト

　選択肢は全て文脈に合致するため、テストを解くために文脈を必ずしも読む必要はない。したがって、実際には単独で単語を提示するテストと似た種類のテストである。それでも文脈内で提示する理由は、語彙はできるだけ文脈内で提示すべきである、と言われているためである。

　また、今回は選択肢を英語で提示しているが、選択肢を日本語で提示することもできる。

スライド12：問題例6

文脈内でのテスト

　問題例5とは異なり、必ず文脈を読んで答えなければならない。日本語の意味を尋ねたり書かせたりするわけではないため、「スペルと意味が結びついているか」を直接的に測るわけではないかもしれない。しかし、文脈に合う意味を考え、それを英語で書くということが要求されるため、少なくとも間接的には「スペルと意味の結びつき」をテストしていると考えられる。

　問題例では、最初のスペルを記載することで、教師が書かせたいと思っている単語を書かせるように導いているが、全くの空欄にすることも可能である。また、2問目は過去形のedを空欄の後に提示しているが、これを提示しないでおくこともできる。edを提示しない場合、文法知識の測定も混在する、より総合的なテストとなる。

スライド14：問題例7

派生語のテスト

接尾辞は単語の品詞を変えるため、品詞についての知識がある生徒に対してはこのような出題が可能である。

スライド15：問題例8

派生語のテスト

品詞についての知識があまりない生徒に対しては、このように品詞名を直接指示しない方法で出題することもできる。

スライド16：問題例9

コロケーションのテスト

単語は単体で遭遇することよりも文脈内で遭遇することの方が多いため、他のどのような単語と共に使用されるかを知ることは有効である。このような知識を測るテストである。選択式ではなく記述式でも出題できるが、採点基準を作成するのが難しくなる。

スライド17：問題例10

関連語のテスト

　頭の中にはメンタルレキシコン（心的辞書）があり、覚えた英単語はメンタルレキシコン内でネットワークを形成している。このネットワークが英語母語話者のものに近いかどうかを測るためのテストである。選択式ではなく記述式でも出題できるが、採点基準を作成するのが難しくなる。また、コロケーションのテストよりも正解・不正解の判断が難しくなるため、不正解の選択肢（錯乱肢）を作成するときには、明らかに関連が無い単語を使用する必要がある。

スライド19：問題例11

セルフ・レポート形式。

　厳密にはテストではないため、得点を算出するものではない。むしろ、1つの単語について深く調べ、その単語の知識についての発達を長期的に調べるのにふさわしいと考えられる。カテゴリーは得点ではないため、IからVをそれぞれ1点から5点のように得点化すべきではない。「現在、この生徒はこの単語について、IIIの段階にいる」というように、診断的に使うべきである。

スライド23：問題例12

空所補充形式のテスト（多肢選択形式）

空所補充形式では正答がたくさん出過ぎてしまう場合、または特定の文法項目に焦点を当ててテストしたい場合に使用できる。問題例の場合、空所補充形式であり、且つもし1文目のみを使用する場合には、選択肢の単語すべてが正解となってしまう。しかし、文脈を増やしたり選択式にすることで、この場合はcouldの用法に焦点を当てることができる。

スライド24：問題例13

空所補充形式のテスト（多肢選択形式）

問題例12とは形式が似ているが、語順を尋ねるテストである。選択肢は、1つ（d）を除いて、語順が正しくないものである。問題例12の応用のように、より文脈を長くして尋ねることもできる。

スライド25：問題例14

空所補充形式のテスト（多肢選択形式）

問題例13と似ているが、選択肢は全て文法的に正しいものである。会話としてのCohesion（結束性：会話がつながって、まとまっていること）を問う問題であるため、正解にたどり着くためには会話の意味を正しく理解することが必要である。

スライド26：問題例15

空所補充形式のテスト

　理想的には、答えが一つに定まるような文脈を用いることが望ましい。なお、1問目の正答はwas, 2問目の正答はOtherwiseである。

　もちろん、より長い文脈を使用して以下のようなテストを作成することもできる。

以下の空欄に、aまたはtheを書き入れなさい。ただし、aとtheのいずれも入らず冠詞が必要無い箇所にはNA (No Article) と書きなさい。

In England children go to \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ school from Monday to Friday. \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ school that Mary goes to is very small. She walks there each morning with \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ friend. One morning they saw \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ man throwing \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ stones and \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ pieces of wood at \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ dog. \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ dog was afraid of \_\_\_\_\_\_\_\_\_\_ man.

スライド27：問題例16

空所補充形式のテスト

　問題例15と似ているが、より答えを限定しやすい形式のテストである。答えが必ず1つに決まるため、採点がしやすい。

スライド28：問題例17

書き換え形式のテスト

空所補充形式よりも長い語句を記入しなければならないため、答えにバリエーションが出やすい。そのため、部分点をつけるかどうか等、採点基準をあらかじめ定めておく必要がある。

スライド29：問題例18

インフォメーション・ギャップ

　それぞれの生徒に異なる情報を持たせ、その情報を交換させるために特定の文法項目（今回は疑問文の作成）を使わせる。テストではなく授業内で行うタスクとしても使用できる。テストとして使用する場合には、教師があらかじめ採点基準を設けておき、タスクが遂行できたか、作成した英文は文法的に適切だったか、等についてそれぞれ点数をつけるとよい。

ここで示したようなものだけではなく、例えば洋楽の歌詞の中で、空欄にしておく箇所を変えたものを2つ作り、まず歌詞を聞き取らせ、その歌詞があっていたかどうかをお互いに英語で質問して答え合わせをする、というような方法でインフォメーション・ギャップを作るような方法もある。例えば、Let It Beを用いた場合、以下のような形となる。

Student A

When I find myself in times of ( )  
Mother Mary comes to me  
Speaking words of wisdom, let it be  
And in my ( ) of darkness  
She is standing right in front of me  
Speaking words of wisdom, let it be

Student B

When I find myself in times of trouble  
Mother Mary ( ) to me  
Speaking words of wisdom, let it be  
And in my hour of darkness  
She is standing ( ) in front of me  
Speaking words of wisdom, let it be

スライド30：問題例19

自由英作文

　測定したい文法項目が産出されるようなトピックを用いて、自由英作文を書かせることにより、その文法項目のテストをすることができる。スライドでのトピックの1つ目は、未来形を多く産出させるトピックであり、2つ目は過去形を多く産出させるトピックである。